



日本植物病理学会ニュース 第58号

(2012年5月)

【学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成24年度日本植物病理学会大会は3月28日(水)から30日(金)まで、福岡市の福岡国際会議場において開催されました。昨年度の東日本大震災による中止を受け、2年ぶりの大会であり、福岡では8年ぶりの開催となりました。会期を通して天候にも恵まれ幸いでした。今年度は、九州地区の担当で、大会事務局を九州大学に設置し、前年秋の九州部会の際に、部会幹事をはじめ、佐賀大学、鹿児島大学、宮崎大学、東海大学、南九州大学、および九州沖縄農業研究センターならびに九州、沖縄の8県の農業試験場等の植物病理学会員ほか植物病害関係者60余名の方々に大会運営委員をお願いし、各講演会場の設営や当日の運営にご尽力いただきました。とくにプログラム委員長の鹿児島大学岩井久先生、大会幹事長の古屋成人先生をはじめ、中村正幸先生、草場基章先生、竹下稔先生、松元賢先生には心から感謝申し上げます。

今年度の学会では、大会前日の3月27日に開催された第2回日韓合同シンポジウムとの同時対応に鑑み、大会事務局では、例年好評であったポスター発表や市民シンポジウムを止め、すべて口頭発表とすることで臨みました。当初、申し込み数に多少の不安もありましたが、最終的には450題を超える発表が行われ、また学生優秀発表賞の選考対象も134題を数え、例年同等の講演数となったことで、関係者一同喜びとともに安堵した次第です。

大会参加者は名誉会員および永年会員をはじめ、賛助会員等も含めて900名を超える大盛況でありました。一会場当たりの運営担当委員数が十分ではなかったにもかかわらず、スムーズに進行できましたことは、ひとえに講演者、座長および各会場の進行係の皆様のご協力のおかげと感謝しております。

懇親会は28日の夕刻、市内のホテルで開催され、約500名の皆様が参加されました。大会副委員長でもある佐賀大学大島一里先生の司会によりまして、来賓の福岡県農

業総合試験場の大神良弘場長から歓迎のお言葉を賜り、韓国植物病理学会の Eun Woo Park 会長からお祝いのご挨拶をいただきました。ついで、鏡割りのあと、佐賀大学名誉教授野中福次名誉会員の音頭で乾杯して開宴となりました。会場では福岡県はじめ九州各県の地酒や焼酎、名産品に加え、豪華料理がテーブルに並び、出席者の活発な意見交換やご歓談の中、大いに盛り上がりました。

千人規模の参加者をお迎えする会場の選定においては、8年前と同じ福岡国際会議場での大会開催となりましたが、会場費等の諸経費も昔どおりとはいかず、懇親会場についても然りで、やむなく例年よりもご参加の皆様におきましてご負担をおかけすることになりましたこととお詫びいたします。

最後になりますが、本大会が大きなトラブルもなく滞りなく終わることができましたのは、学会役員、評議員はじめ大会参加の皆様、九州地区の会員の皆様、さらに九州沖縄農業研究センター、福岡県農林水産部ほか九州各県関係者の皆様のご支援の賜物とあらためて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。(土屋健一)

2. 第2回日韓合同シンポジウム開催報告

第2回日韓合同シンポジウムが、平成21年に済州島で開催された第1回同シンポジウムに続いて、平成24年3月27日(火)に福岡市の福岡国際会議場で開催された。参加者数は韓国からの133名を含む総勢481名で、その約3分の1が学生会員であった。午前中、両学会長、両組織委員長からの開会の辞があり、K-W. Lee, 上田両氏の基調講演があった。午後は3会場に分かれて、1) 新病害、2) 新防除法、3) MPMI のテーマのもと、両国からの招待講演があり、どの会場も大変新鮮な刺激と感動に溢れていた。その後、総数232題のポスターセッションが開催され、国籍や年齢を超えて、活発な意見交換が行われた。この興奮醒めやらぬうち、夕方のミキサーへと移行し、そこでさらに交流が深められた。なお、会も盛り上がった頃、両学会

長署名の優秀ポスター賞の賞状と記念品が両国学生に手渡された。翌日は、(株)ニチノサービス佐賀事業所、(独)九州・沖縄農業研究センター久留米研究施設を主な研修地とするエクスカージョンに韓国側の方々が多数参加された。前者では、東村所長には、ソウルから通訳として H.S. Ham 氏を招集されるなど見学会を周到にご準備頂いた。後者では、鮫島、上田、山下、高山各氏が主にレタスやイチゴの植物工場の素晴らしい設備についてご紹介いただき、ここでも参加者の関心は高く、活発な質疑応答があった。このように国際学会にも匹敵する大盛況となり、両国の参加者から大賛辞を受けた。これはひとえに秋光、石井、一瀬、白石、夏秋、廣岡という強力すぎる組織委員各位、S.H. Yu 韓国側組織委員長等のご努力によるものである。また、難題解決に尽力頂いた難波学会長、土屋大会委員長他委員の皆様、いろいろご助言、ご尽力いただいた松原学会事務局員、早朝から受付、会場設営、進行にご協力頂賜った学会員や学生諸君、ご寄付頂いた JFRAC メンバー各社に衷心よりお礼申し上げたい。

(日韓合同シンポジウム組織委員長 露無慎二)



エクスカージョンでの集合写真

3. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第12回植物病原菌類談話会

日本植物病理学会大会最終日の平成24年3月30日、閉会式終了後の17:30から福岡国際会議場において第12回植物病原菌類談話会を大会開催地実行委員会の協力も得て開催した。大学、公立の試験研究機関、独立行政法人、検疫機関、農薬や種苗会社、農業団体など、学生・研究者152名の参加があった。

今回の談話会では岐阜大学の須賀晴久先生がコーディネーターを務め、「病原性は分子系統に沿っているか？—あなたはいつから病原菌？—」というテーマにて、植物病原菌類の系統進化と寄生性・病原性の関係について講演

が行われた。それぞれの講演題目と講演者は、「植物病原性 *Alternaria* における病原性の進化と分化—遺伝子水平移動が関与か？」赤木靖典氏（鳥取大学）、「イチゴから分離された *Colletotrichum gloeosporioides* の分子系統解析とイチゴに対する病原性」鈴木健氏（千葉県農林総合研究センター）、「いもち病菌 *Pyricularia* spp. のゲノム進化と寄生性分化」中馬いづみ氏（神戸大学）、「トマト萎凋病菌 *Fusarium oxysporum* f. sp. *lycopersici* の病原性進化と分子系統について」稲見圭悟氏（東京農工大学）であった。「菌類は、進化上、いつ、どのように植物への寄生性・病原性を獲得したのであろうか？」との疑問への答えを探るべく、講演者が研究対象とする菌種・菌群について系統進化と寄生性・病原性の関係を紹介してもらうことで、植物病原菌類の分類と進化について理解を深めることを目的とした。各講演者共にこれまでの研究成果を基礎に興味深い実例に基づいて個々の菌群について解説された。

最後に、昨年7月のオーストラリア・メルボルンでの国際植物学会議で大きく変更された国際植物命名規約について、最も大きな影響が予想される第59条の変更点について、当談話会幹事でもある三重大学中島千晴先生により「植物命名規約改訂は植物病理学分野に衝撃を与える」との標題にて速報として話題提供を受けた。これまで平行して用いられてきた菌類の有性時代と無性時代の学名統一が決定され、今後、植物病名目録を始め、さまざまな局面で植物病理学にも影響を及ぼすことが想定される。植物病原菌類談話会では今後も適宜関連内容についての話題提供を行って行きたい。

開催準備にあたってご支援頂いた大会事務局の方々に深く感謝いたします。来年度も植物病理学会大会にあわせて本談話会の開催を予定しております。

(植物病原菌類談話会代表幹事 青木孝之)

(2) 第22回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

第22回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、平成24年3月31日、福岡国際会議場で開催された。第2回日韓シンポジウム、平成24年度大会に続く一連のスケジュールの最後に当たったが、公的試験研究機関、大学、農薬メーカー、農業者団体など計147名（講演要旨のみを含む）の方の参加を得て、終日、熱心な講演、討議が行われた。

講演は計6題。最初に大分県農林水産研究指導センターの渡邊久能氏から、大分県の落葉果樹における殺菌剤耐性菌の現状について報告いただいた。大分県では近年、ナシ炭疽病の恒常的な発生が続いており、その原因として導入の進んだ新品種が本病に高い感受性を有することとQoI剤およびベンゾイミダゾール系剤に対する耐性菌の出現が

見出された。対策として、QoI 剤に使用のあり方について苦慮している点が紹介された。

鳥取県西部総合事務所農林局の佐古勇氏からは、ネギにおける DMI 剤耐性菌の発生動向として、主要病害のさび病および萎凋病での鳥取県の取り組みをご報告いただいた。薬剤の効力低下や突発的な多発生の要因が、耐性菌の出現によるものか否かを判断するに当たっては、従前からの薬剤感受性のモニタリングが重要であり、両病害について検定手法の開発から防除体系の構築に至るまでを解説いただいた。

シンジェンタ・ジャパンの林敬介氏からは、イネいもち病の防除剤のうち、メラニン合成阻害剤に属する還元酵素阻害型殺菌剤 (MBI-R) に関する話題提供をいただいた。MBI-R 剤については 1970 年代の登録以降、耐性菌の発生事例は報告されていない。今回は 2004-2011 年に実施されたピロキロンに対する感受性の全国調査を中心に報告いただいた。今回の調査でも耐性菌は確認されず、これまでの状況と合わせて MBI-R 剤で耐性菌が顕在化する可能性は極めて低いと考えられる。

続く 2 題はわが国で開発された新規殺菌剤を取り上げた。まず、Meiji Seika ファルマの松村誠氏から、新規殺菌剤デブフロキンについてご講演いただいた。本剤はいもち病防除の茎葉散布剤、特に防除適期を逃した場合に備え、いもち病菌の感染後の散布でも有効ないわゆる「治療効果」を備えた薬剤として開発された。既に発症した病斑に散布した場合でも、孢子形成を阻害し二次伝染の拡大を阻止する作用を有するなどの特徴を紹介された。

大塚アグリテクノの木村幸氏からは、新規殺菌剤フルチアニルについてご紹介いただいた。本剤は従来の殺菌剤にはないユニークな化学構造を持ち、殺菌スペクトラムが極めて特徴的で各種作物のうどんこ病に対してのみ高い効果を示す。特にうどんこ病菌の吸器形成を阻害することで栄養吸収を妨げ、二次菌糸の伸長や分生子形成と離脱の過程を抑制する可能性が考えられるとのことであった。

最後に、農業環境技術研究所の石井英夫氏から「QoI 剤及び SDHI 剤 (コハク酸脱水素酵素阻害剤) 耐性菌の実情と薬剤使用ガイドライン」と題し、未だ発生報告が相次ぐ QoI 剤耐性菌の現状と近年、最も注目を集める SDHI 剤耐性菌の国内外での状況、感受性検定法の留意点、耐性機構のメカニズム等、多岐にわたってご報告いただいた。さらに、両剤の耐性菌の発生事例にわが国における栽培・防除体系等を勘案して、耐性菌研究会として策定した「野菜・果樹・茶における QoI 剤及び SDHI 剤使用ガイドライン」を提案させていただいた。本ガイドラインについては、あ

らためて関係各位へ伝達し、普及・活用を諮って参りたいと考えている。

なお、今回のシンポジウムの開催に当たって、大会事務局の皆様には多大なるご支援ご協力をいただいた。あらためて厚くお礼申し上げる次第である。(足立嘉彦)

(3) 第 12 回バイオコントロール研究会

第 12 回バイオコントロール研究会は、平成 24 年 3 月 31 日 (土) に福岡国際会議場で約 150 名の参加を得て開催された。前年度に開催予定であったが、東日本大震災により延期となっていた。今回は、開催事務局を担当していただいた九州大学土屋健一氏らの企画により、「生物農薬が直面している問題点と今後の展望」のテーマで、3 部構成で計 10 題の講演発表が行われた。基調講演は会長 (農業環境技術研究所対馬誠也氏) によりテーマである生物農薬の直面している問題点と今後の展望について講演発表があった。第一部「生物農薬の現状と今後の展開」では、農林水産省消費・安全局植物防疫課の里山雅人氏からは農林水産省が推進している IPM における生物農薬の現状と今後へ提言を、日本植物防疫協会山梨試験場の田代定義氏からは、これまでに新農薬実用化試験で取り組まれてきた生物農薬について、生物農薬開発の難しさと期待を、宮城県農林水産部農業振興課の大場淳司氏からは、現在普及している水稻種子消毒剤の現状と問題点を、日本微生物防除協議会の安井強氏からは微生物殺菌剤の現状分析と問題点について講演発表がなされた。第二部「新しい生物農薬の展開」では、多木化学株式会社の秋津教雄氏から生物農薬の新しい使用方法について種子コーティング方法の紹介があり、石原産業株式会社の小川宗和氏から数少ない土壌病害に対して効果を示す新しい生物農薬エージェントの紹介があった。第三部「研究の最前線」として、農業環境技術研究所の黒瀬大介氏、東京農工大学大学院農学研究院の森山裕充氏、神戸大学大学院農学研究科の池田健一氏の若手 3 名から、世界をリードするユニークな生物防除研究の講演発表があった。進行は幹事長が務め、講演終了後幹事長の司会で総合討論がもたれ、盛会裡に終了した。なお、講演要旨集 (2000 円) をご希望の方は、対馬 (農環研) seya@affrc.go.jp までご連絡頂きたい。(対馬誠也)

(4) 技術士 (農業部門・植物保護) 試験対策セミナー

平成 24 年度日本植物病理学会大会の第 2 日目 (3 月 29 日) の 13:40 ~ 15:10 の間、福岡国際会議場 5 階 504/505 室で、標記のセミナーを開催した。主催は日本植物病理学会の技術士対応委員会。なお、本セミナーの開催に当たっては、大会委員長の土屋健一先生や、古屋成人先生をはじめとする大会委員の先生方には会場のことなど、特段のご配慮を

いただいた。厚くお礼を申し上げる。本セミナーは前年の平成23年度大会に際して行う予定であったが、東日本大震災のため中止となり、本年、改めて開催することになった。そのため、セミナーの講師は、業務でご都合がつかなかった1名を除き昨年のメンバーを中心にお願いした。

総合司会は、5学会技術士育成推進委員の築尾嘉章氏（花き研究所）が行った。先ず、技術士対応委員長である難波成任氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）より、技術士制度について概略が解説され、植物保護関連5学会として「農業部門・植物保護」の技術士が100人を超えることが最初の目標であることが話された。次いで、技術士対応委員であり技術士である濱本 宏氏（法政大学生命科学部）より、第一次試験、第二次試験の概要について解説された。それぞれの試験の内容の他に、二次試験の受験資格を得るための実務経験についても解説がなされた。また、本年春より日本技術士会のウェブサイトにて試験の過去問題が掲載されていることが紹介され、試験対策に活用してほしいとのことであった。合格体験では、まず一次試験合格者として岡野夕香里氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）から一次試験受験対策のポイントが解説され、過去問題を解きながら必要な知識を蓄積することが効率よい勉強法であると話された。二次試験合格者である栢森美如氏（北海道立総合研究機構中央農業試験場）からは、試験を受験するきっかけから、自らの試験対策、受験の際に心がけたこと、さらに現在受験指導を行っている立場から気づいたことも交えて解説いただいた。特に「伝え聞くところによる失敗事例」は、他人事とは思えない受講者もいたためか、笑いの中にも頷く姿が見られた。同じく二次試験合格者である舟久保太一氏（山梨県総合農業技術センター）からは、筆記試験での記述量が想像以上に多いため、書き疲れしない筆記具をあらかじめ確認しておくこと、二次試験で答えた内容を口述試験で問われることがあるので、試験終了後にしっかり自分の回答を思い出してメモしておくこと、など実践的なアドバイスを交えて解説をいただいた。難波氏の司会で行われた質疑応答では、具体的な試験対策に関する質問とともに、植物保護の技術士の将来に関する議論もなされた。なお、本セミナーで配布した資料は、植物病理学会ホームページにて会員向けに公開する予定である。

セミナーの参加者は、民間、大学、都道府県、独立行政法人等から75名で、前回の52名を大きく上回り会場は満員であった。特に、学生、教員など大学関係者が38名を数えた。各話題ともいづれも説得力のある内容で、終了後も、講演者を囲んで活発な話し合いが持たれ、活気あふれるセミナーとなった。参加者並びに講演者に対し、主催者

一同心よりお礼を申し上げる次第である

(技術士対応委員会)

4. 技術士対応委員会

平成23年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）で12名が合格

平成24年3月5日に平成23年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）の合格者が発表され、次の12名の方が合格されました（敬称略）。

大上大輔（ホクレン農業総合研究所；本会会員）、小野寺鶴将（北海道立総合研究機構中央農業試験場；日本応用動物昆虫学会会員）、大島研郎（東京大学大学院農学生命科学研究科；本会会員）、大久保博人（前・国際農林水産業研究センター；本会会員）、青木一美（茨城県農業総合センター；本会会員）、落合弘和（農業生物資源研究所；本会会員）、岡山健夫（奈良県植物防疫協会；本会会員）、富家和典（滋賀県農政水産部農業経営課；本会会員）、三宅律幸（愛知県農業総合試験場；本会会員・日本応用動物昆虫学会会員）、天野昭子（岐阜県農政部農産園芸課；本会会員・日本農薬学会会員）、岩館康哉（岩手県農業研究センター；本会会員）、生咲 巖（香川県農政水産部農業経営課；本会会員）。

現在、技術士（農業部門・植物保護）の合格者は57名となりました。本年も国の独立行政法人と大学から落合さんと大島さんが合格され、それぞれ3人目の合格者となりました。引き続き、都道府県や民間企業とともに、さまざまな職場から多くの方の受験をお願いします。平成24年度の技術士第一次試験は平成24年10月8日（月）に行われます。また、技術士第二次試験の筆記試験は平成24年8月5日（日）に行われます。詳細は日本技術士会のホームページをご覧ください。

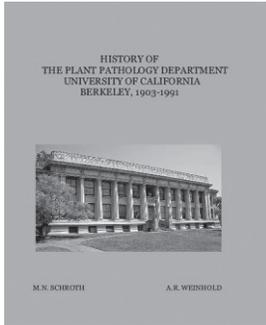
日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会は、技術士・農業部門・植物保護の社会での活躍について、積極的に取り組んでいます。平成24年度も多くの技術士・農業部門・植物保護の誕生を期待しています。

【書評】

M.N. Schroth and A.R. Weinhold 著「カリフォルニア大学バークレイ校の植物病理学科（1903-1991年）の歴史（History of the Plant Pathology Department University of California Berkeley, 1903-1991）」

標準ポートレート版（20×25 cm），260 ページ

2011年8月 Blurb, Inc. 定価 \$79.204（ソフトカバー）



カリフォルニア大学（University of California）は、10個のキャンパス（Campus, 校）からなる州立大学で、中でもバークレイ（Berkeley）校が最も古く1868年の創立である（ウィキペディア：フリー百科事典）。同校の植物病理学科は、全米最初の学科で1903年に開設されたが、

1991年に自然資源大学院（College of Natural Resources）の植物と微生物生物学科（Botany and Microbiology）に吸収併合され88年続いた学科は消滅した。その詳細は不明だが、分子生物学など新しい学問に合わせた予算措置などが原因かもしれない。

本書は同学科の最後のチェアマン（学科長）を勤めた Schroth 先生と筆者の留学時（1962～1967年）のアドバイザーであった Weinhold 先生により学科の紹介記事、先生方の伝記、死亡記事、弔辞などをもとに纏められた。ページ番号もなく内容も必ずしも秩序だててはいないが、本の出版直前に写真などを提供し協力した縁で、ここに雑文を纏めて紹介したい。ちなみに日本では、駒場農学校（東大農学部の前進）に世界最古の植物病理学科が1880年に開設されたが、わずか1年で消滅した（三沢正生 1980）。

1903年当時カリフォルニア州で問題となっていたアスパラガスさび病の防除を目的に29歳の R.E. Smith 先生はマサチューセッツ州からやってきたが、硫黄剤で防除に成功後もモモ、ナシ、クルミなど多くの病害防除を手がけ、植物病理学科を創設し研究費の調達や学科の管理運営に努められた。その当時の先生の著作には20世紀初頭のカリフォルニア州の農業の様子も記載されとても興味深い。なおデービス（Davis）とリバーサイド（Riverside）両校の植物病理学科はバークレイ校から派生した学科である。著者の在籍当時のチェアマンはフザリウム菌の分類や生物学を研究された Snyder 先生で、教授陣は約25名、事務職員、研究補助員などは約50名、大学院生が22-28名、学部学生が2名、ビジターは年に3名-10名であった。松尾卓見、池上八郎、比留木忠治の諸先生などもこの時期にポストド

クとして過ごされた。植物病理学科の図書室は全米1とされ瓜谷郁三先生なども利用した。Yarwood 先生のウイルス病、うどん粉病、獲得抵抗性などに関する研究業績は、引用度が世界1とされた。また W. Takahashi 先生は日系人最初のカリフォルニア大学教授で、Rawlins 先生とともに電子顕微鏡が未発達期の1932年にタバコモザイクウイルス（TMV）の形態を複屈折による物理学的手法を用いて明らかにした。米国植物病理学会賞のルースアレン賞の Ruth Allen 先生も米国農務省に所属し、植物病理学科の職員でもあった。その他の研究業績はウイルス汁液接種法、ブドウピアス病（Pierce disease）の病原細菌 *Xylella fastidiosa* の培養、不完全菌の Dual phenomenon やヘテロカリエシス、かびの変異や生殖に関する研究、生物防除法、UC システムによる育苗土壌の製法やクロロピクリンなどによる病害防除など基礎から応用まで多岐にわたり米国のみならず世界の植物病理学をリードし、多くの人材を生んだ。

参考文献 三沢正生 1980, 第1章

植物病理学事始め 植物病理学史 1-7 頁

（渡邊恒雄）

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、濱本 宏、根岸寛光、植草秀敏、宮田伸一
各委員宛

編集後記

学会ニュース第 58 号をお届けします。まず、学会活動報告です。

昨年度は東日本大震災のため大会は開催されず、2 年ぶりの大会開催となりましたが、その 2 年分の思いが込められたような素晴らしい博多での大会となりました。今回の大会は福岡国際会議場という立派な会場で開催されましたが、久々の博多での開催で参加者数が 900 名を越し、演題数も 450 題を越え、盛会裏に終了いたしました。大会委員長の九州大学・土屋先生はじめ九州の各大学、国、そして県の方々から成る大会運営委員会の皆様のご尽力に対し感謝の意を表したいと思います。また、この大会に先立って第 2 回日韓合同シンポジウムが開催されました。今回は当初の予想をはるかに上回る 500 名近い参加者があり、しかも韓国から 130 名を超える参加者がありました。また内容も基調講演、招待講演、ポスター・セッション、ミキサー、さらにエクスカージョンと盛り沢山のプログラムが露無組織委員長の表現のように「大変新鮮な刺激と感動に溢れた」国際セミナーとなりました。長い間準備にご尽力いただき、また当日の運営に奔走された組織委員会の先生方に深謝したいと思います。これらの大会や日韓合同セミナーのほか、大会の前後に開催されました研究会及び談話会、いずれも盛況で、活発な活動が継続しており、同慶の至りです。今回の博多での大会の復活を祝福するように、公園の桜が咲き始めておりました。皆様、お疲れさまでした。

盛況であった日韓合同セミナーで学会の一つの課題であった国際化が順調に進んでいることが確認できましたが、やはり学会の大きな課題の一つである「技術士」も植物保護部門で平成 23 年度は 12 名の合格者を出すことができました。当座の合格者 100 名という目標に確実に近づいています。これも稲葉前技術士対応委員会委員長のご尽力、さらに現委員長の難波先生はじめ技術士対応委員会の牽引力のおかげです。今大会での技術士試験対応セミナーにより合格者の大幅増が期待されます。

今春より学会誌編集委員会・委員長を高橋賢司さんに引き継ぎます。従って、今回が学会ニュースの最後の編集後記となりますが、新編集委員会のお引き立てのほど宜しく願います。長い間のお付き合い有難うございました。

(加来久敏)
